

押切の名前の由来・歴史について

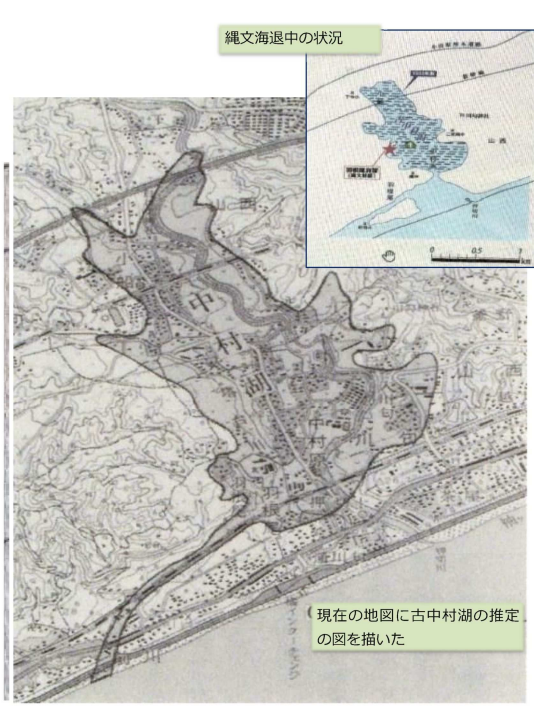
2024年3月
前羽地区まちづくり委員会作成

押切川は、上流を中村川、下流では厩河（うまやがわ）と呼ばれていました。源は大井町高尾、震生湖より流れ出る藤沢川を合わせて、五所の宮、小竹（おだけ）、小船（おぶね）などの中村郷を貫流し、川匂地区で大きく曲流し、前川で海に注いでいました。この川の渡し場に前川関が設けられ、ここの人馬の通行税が鶴岡の八幡宮の造営費にあてられたとおいう、室町時代中期の記録が残っています。今もこの地点を関下川といっています。前川の地名は厩河（うまやがわ）の訛（なまり）であるともいわれています。それが今から約500年前、室町時代後期、大洪水で海岸の砂丘を押切り、現在の押切川になったといわれています。ですから、それ以前の小竹、中村原の辺りは、池か沼であたにちがいありません。

そのむかしの官道についてはいろいろな説がありますが、坂本駅（関本）-千代-六本松-小総駅（おぶさえき）（小竹脇）-川匂・釜野-箕輪駅（みのわえき）（日比多村）の線が考えられます。小総駅（おぶさえき）を国府津とする説もありますが、小竹をとるとここに小船という地名が残っていることが残っていることが結びつく説にうなづけるものがあります。

厩河（うまやがわ）時代の地形がどんな状態であったか想像も及びませんが、現在の地形は押切川の流れてによって形成されたと考えべきでしょう。この川が押切ったことによって、この河口が絶好の船着場になり、梅沢の浦といわれ、急速にひらけてきました。そして徳川時代になり、東海道が開かれてからは、大磯と小田原の間（あい）の宿として、梅沢の里が大変繁昌したといわれていますが、その中心はこの押切りにあったようです。その頃押切りの港には、千石船が出入し、相庄（あいしょう）とか峯尾商店とか有力な廻船問屋があり、活況を呈していました。この押切を中心に、東の坂の上には立場茶屋、本陣まがいの旅籠があり、北の方下原には料亭数軒があり酌婦などもおり、夜の賑わいは大変なものでした。また、西方の町屋も相当賑わっていたといわれています。そうして徳川時代から明治になりましたが、二宮駅が出来て二宮が繁栄するまでは、この押切の繁栄が続いていました。押切には前期の廻船問屋のほか、郵便局、銀行、呉服屋二、雑貨酒類商二、下駄屋三、醤油屋一、足袋屋一、茶碗屋一、菓子屋一、床屋一、桶屋一、豆腐屋一、銭湯一、建具屋一、寿司屋一、鍛冶屋一、石屋一、などの商家や職人があり、それに伴う運送屋として、馬力二軒、人力車一、大八車十軒などがあり、近隣町村では押切へ行けば何でも間に合うといっ、何かにつけて押切に出て来たものでした。

やがて徳川幕府が倒れ、明治維新の世となり、鉄道が開通し、陸上交通の便が発達すると押切の地位が、だんだん変わってきました。そして明治三十五年二宮駅が開設されると、駅を中心に町の様相は大きく変わってきました。その上、明治三十八年押切の大火が発生し、街の大半が焼失してしまったので、決定的な打撃を受けたのです。家族七人が焼死したという悲惨な事故が伝えられています。そのなこんなで、かつての繁栄は過去の昔語りとなってしまいました。



令和2年度橋北地区まちづくり通信特集号
小船第2区 早野耕平さん資料引用



松屋本陣の跡

押切の名前の由来・歴史について

2024年3月
前羽地区まちづくり委員会作成

押切の行政区画は、大変入りこんでいます。押切が比較的新しくひらけたところで、川匂や羽根尾から分家して入植した家が、その出身地の行政下に入った結果ではないかと考えられます。しかし、押切地区の住民は、地域の共存共栄を考えて緊密に結ばれています。

その一つの例は消防団です。むかしは消防組とっていました。この消防組をつくったのは、羽根尾の峰尾初五郎という人で、百年以上も前のこととわれています。初五郎さんは、自前で竜吐水（りゅうとすい）（木製の消防ポンプ）を提供し、地域の住民に熱心に呼びかけました。そして、初代の組頭に推され、地域の防火について、長く献身的な活動をされました。その後、消防団と名称も変わり、押切の大火の教訓を生かして、明治四十二年新しいポンプを購入し、地域の防災につとめてきました。押切消防団の特色は、地域独自のもので、二宮町や小田原市からの援助や指導も受けますが、創設の精神をうけついで、行政区画の別に関係なく、青年になると入団することになっています。今でも入団すると、押切独特の法被（はっぴ）や頭巾は渡されます。毎年正月三日は出初めで、器具の点検、役員の変更、年間計画の話合いなどを行っています。むかしは半鐘が鳴って消防が出動すると、だまっていたりも必ず米を二升炊いて握り飯を作って労をねぎらうことになっていました。いわゆる炊き出しをする家が五軒決まっていた。それも戦中戦後の食糧事情で、いつしか廃止されました。

もう一つは付番（つきばん）という仕来りです。押切の住民は、それぞれ川匂神社と白鬚神社の氏子になっていますが、押切全体としては荒神様（こうじんさま）を祀っています。押切の総戸数は百二十戸、雲雀田（ひばりだ）、東浜、西浜、新茶屋、笠という五つの組に分かれ、各組が一年交替で、荒神様のお祭りや共有地の管理など地域の日常業務をとりしきっています。これを付番と呼んでいます。荒神様の例祭は四月二十九日です。むかし荒神様は白鬚神社に祀ってありましたので、その日は押切からお神輿を仕立てて、白鬚神社へ御神体を迎えに行き、押切でお祭りをし、夕方白鬚神社へお送りしてしていました。現在は押切のお社に祀ってあるので、送迎の行事はなくなりました。このお祭りがすむと付番が交替し、来年の四月二十九日まで、新しい付番が受け持つこととなります。

出典：二宮町郷土誌 作成者 二宮町郷土研究家



押切りの行政区画



金属製手こぎの消防ポンプ



三宝荒神様